

## *Pride and Prejudice* における説話技術の一研究

岡 本 昇

### 目 次

#### 序

##### I. 表現技術について

1. 表現素材の制限
2. 「要約」(summarizing) 手法
3. 「対照」(antithesis) 手法

##### II. 会話技法について

1. Direct Discourse について
  - (1) Comic characters の表現
  - (2) Minor characters の表現
  - (3) Direct Discourse の制約
2. Free Indirect Discourse について
  - (1) 人物描写について
  - (2) 小説構成上の働きについて
  - (3) 抒情的要素の表現

#### 結び

[本論にとりあげた *Pride and Prejudice* からの引用は次の版による。R.W.Chapman ed., *The Novels of Jane Austen*, Vol.II. Oxford University Press, 1923-88]

### 序

Jane Austen の場合、一地方での限られた世界での平穏な生涯、大きな出来事と言えば三回の転居、姉の婚約者や長兄の妻の病死、そして従妹の事故死といったもので、彼女は比較的平和で静かな環境に生きた。父は地域活動に精出す一介の牧師、母は潑刺とした機知に富む主婦、8人兄弟中7番目で次女という平凡な家庭に育つ彼女は、幸福な時代の一国民として、伝記作家には材料に苦しむ程 波瀾ある生涯とは程遠い。

作品への接近法、小説技法の研究にも多々方法はあろう。作者の生いたちから死まで伝記を模索し、作品を検索しながら、作者をいわば鏡の奥に見つつ作品を究明していく、歴史的に作者なる人間を扱う方法もあろうし思想史ないしは社会史をふまえた研究もある フェミニズムあるいは女性と文学についての研究も意義あることである。

一方、作者という私的な個々のことに検討あるいは価値判断を求めず、たとえば絵画や書の

ように作品そのものを独立した存在として、純粹に一つの芸術として解析する途もある。  
 “History develops, art stands still” という E.M.Forster の言葉にも支えを得<sup>(1)</sup>、後者の  
 途を手探りして、Jane Austen の代表作 *Pride and Prejudice* を考察する。

“3 or 4 Families in a country village is the very thing to work on” (田舎の三、  
 四軒の家族が、小説には打って付けの材料です)<sup>(2)</sup> と Austen は述べて、小説材料を意識的に  
 制限する。ところが彼女は、とぎすました英知と繊細な心で、小さなサークルを形成する善男  
 善女の 様様に起伏する感情のあやを 丹念にゴシック模様に織りあげて、完璧とも言うべき  
 芸術作品に仕立てている。活動範囲の狭い彼女には ‘history’ といったものは乏しく、その人  
 生は ‘her story’ のみで、出来事の連なりである。色々と恋事はあったにせよ実を結ぶには至  
 っていない。「歴史を持たない幸福な人間」その彼女の作品に命を与えているのは、会話表現  
 を中心に生き生きと表現された人物描写や、plot の設定等の優れた物語性、説話の技術であろ  
 う。41年余の生涯、独身のままに終った彼女が残した偉大なるもの、それは言葉の芸術である  
 ように思える。説話技術の一研究として、手はじめに、Jane Austen の小説に目を向けた所  
 以である。

本論の場合、作者の動機からではなく、作品という結果から考えてみたい。登場人物達が、  
 如何なる手法で人間らしく活動しながら plot に貢献し、どのような特徴の技法によって nar-  
 rative structure 全体が表現されているか探りたいと思う。結論的には *Pride and Prejudice*  
 における、表現上の「劇的な」要素を模索することを狙いとして、この作品をとりあげてみたい。

## I. 表現技術について

### 1. 表現素材の制限

小説家の表現材料は無限に及ぶが、それは具体的、想像的、心情的なものをふくめ、作家自  
 身の観察・体験の創造的所産である。結果的にこれが小説の枠組みを決定する。この意味でこ  
 れが作品と作家、芸術と芸術家をつなぐ唯一の接点ではないかと思われる。

Jane Austen の場合、この見地から彼女をとりまく環境と人間がかゝわることとなる。前  
 者は表現材料の外的条件であり、後者は内的条件である。しかしこの作品にとって重要なのは  
 素材を芸術にかえる作家の手法と態度であり素材への敏感さである。この意味で彼女の素材の  
 取捨選択と強調が先ず重要である。彼女のすべての小説に言えるように、この作品にも素材の  
 狭い制限があり、これがこの作品に演劇性をあたえる効果的な要素となっている。この作品の  
 背景となる舞台は、せいぜい百マイル以内である。その社会背景も限られたものである。この  
 事は登場人物の劇的要素を際立たせ、いわばそこにスポットをあてる効果がある。この小説の

(1) E.M.Forster *Aspects of Novel* (Edward Arnold 1953) p.23

(2) *Jane Austen's letters to her sister Cassandra and Others* ed. R.W. Chapman (Oxford Univ. Press, 1952), No. 100

Elizabeth Bennet 及び他の登場人物の行動範囲は、初段階では Longbourn の地域に集中する。作者は Elizabeth の眼の届かない地域は完全に省略する。そして Elizabeth の行動範囲の拡大とともに次第に小説の舞台は拡大するが、それでも馬車で一日で行ける範囲である。<sup>(3)</sup> 作者は Elizabeth のいない場所についての叙述は narrative plot に関係なきものとして削除していると思われる。概して自然描写も少ないが、それは主人公 Elizabeth の眼をとらえ、彼女の心情に影響をあたえる部分のみに限られる。このことから、この小説では自然描写は2つの重要な役割をもつと考えられる。一つは「時間の経過」を示す役割である。After walking two or three times along that part of the lane, she (Elizabeth) was tempted by the pleasantness of the morning, to stop at the gates and look into the park. The five weeks which she had now passed in Kent had made a great difference in the country, and every day was adding to the verdure of the early trees. (p. 195)

他の一つは、「舞台の移動」を示すことである。これは Pemberley での Elizabeth の印象、Kent における彼女の度々の散歩のくだりに見られるものである。このようにして作者は明らかに自然描写を、人物をリアルに描く補助的手段として用いる。いわば舞台の背景のような役割を与える。そしてそれは、Elizabeth の視点を中心に繰り広げられ、舞台は転換する。このことにつき文中に作者自身の comment が現れる。

It is not the object of this work to give a description of Derbyshire, nor of any of the remarkable places through which their route thither lay; Oxford, Blenheim, Warwick, Kenelworth, Birmingham, &c., are sufficiently known. A small part of Derbyshire is all the present concern. (p.240)

これは自然描写における作者の態度について一つのヒントをあたえるものである。「制約」は、また登場人物にも見られる。即わち plot に関係のない人物はほとんど登場しない。たとえば舞踏会で紹介される dancers についても plot に関係のない人物は知らされない。story に必要のないものは完全に表現から疎外されているようにみえる。

これら選ばれた人物はほぼ当時の中・上流階級と考えられる。上流階級でも無作法で異質的存在の Lady Catherine は厳しく Elizabeth に批判されている。彼等の職業——特に紳士達の仕事も必要以上に明らかにされない。人物の衣服の描写も明らかでない。

子供達の扱いには特に興味がある。元来実社会では家庭と子供は密接な関係がある。しかし

---

(3) Elizabeth の行動範囲 (目的地までの距離)

第1段階 (Chap.26 まで) Longbourn~Netherfield.....3 miles

Longbourn~Meryton.....1 mile

Meryton~Lucas's house.....1 mile

第2段階 (Chap.41 まで) Longbourn~Grace Church St.....24 miles

Longbourn~Hunsford, Kent.....50 miles

第3段階 (Chap.61 まで) Longbourn~Derbyshire.....about 120 miles (Lambton, Pemberley を含む)

この作品では家庭は描かれてもほぼ成人社会に限定され、子供達はほとんど省略される。このことを見ても、彼女のこの著作には説話面の意識的な技術が働いている。storyの中で現れるほとんどの出来事は日常的な範囲を出ない。当然、死の問題もない。このようなことは彼女が人物間の会話のやりとり、感情の繊細な反応に焦点をあて、注目させ、劇化する意図にそうものであろう。

さらに表現の手法について考察すれば、まず、視点は Elizabeth が中心である。ときに他人物に視点が移っても、常に主流は彼女にある。次に注目すべきは、文体が装飾的要素を、可能な限り削除していることである。そして具体的で明晰・簡潔な言語となっている。この事はこの作品を特徴づけている一つとも言える、余計なロマンス性を省くものである。こうして人間相互の心の動きを、客観的にとらえ印象づけることに成功している。感受性は制約され、知的に抑制されている。いわば余計な虚飾をとりさって残った、まじり気のない、彼女の世界の真髓のようなものが強調されて味わえる。

以上から、本作品の「劇的效果」を高めるものとして、彼女の精選された結晶のような表現材料が、大きい役割をはたしているように思われる。

## 2. 「要約」(summarizing) 手法

前項で表現材料を検討し、「制限」の手法を確認したところであるが、それが「空間」にかかわる問題であったとすれば、本項は「時間」にわわかる問題である。

展開のある部分について、突然、スピードが加速するのが感知できる。第一に、各章の冒頭と終りにこの現象が認められる。第一章の冒頭は有名な次の文章から始まる。

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighbourhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families, that he is considered as the rightful property of some one or other of their daughters. (p.3)

そして第一章の結びは次の文章で終る。

Mr. Bennet was so odd a mixture of quick parts, sarcastic humour, reserve, and caprice, that the experience of three and twenty years had been insufficient to make his wife understand his character. Her mind was less difficult to develop. She was a woman of mean understanding, little information, and uncertain temper. When she was discontented, she fancied herself nervous. The business of her life was to get her daughters married; its solace was visiting and news. (p.5)

このような幕開きと幕切れは、いかにも聴衆の視点が舞台の中央に引きよせられ、一幕終っ

て締め括るという凝縮の効果がみられる。「要約」の手法である。同じ役割は小説中の手紙文の効果にもある。それは要点を素早く要約する機能をもつ。この手法により出来事が総括的に要領よくまとめられ読者に知らされる。決して感傷的な性質のものでもなく詮索的でもない。これらによって新事実が現れ、筋が進展する場合が多い。(特に後半) 作品中、13通の手紙文が現れる。手紙に関する言及を含めると、全体で44件以上にものぼる。Darcy から Elizabeth にあてたものを筆頭に Elizabeth にかかわるものが最も多く、それも長文で、筋の進展に重要な役割をもっている。最後の Gardiner 夫人にあてた感謝の手紙は別として、ほとんど Elizabeth すなわち読者への情報伝達のためのものである。そこからこれらの手紙文は Elizabeth の居ない場所についての状況を要約する効果があると言える。その効果はこの手紙文特有の客観的表現によって強くあらわれる。

次に、大小の出来事や周囲の状況についての説明が、いわば全知の語り手によって公表されるような手法で要約される。William Collins の Charlotte Lucas へのプロポーズの後、次の一節がつづく。

Sir William and Lady Lucas were speedily applied to for their consent; and it was bestowed with a most joyful alacrity. Mr. Collins's present circumstances made it a most eligible match for their daughter, to whom they could give little fortune; and his prospects of future wealth were exceedingly fair. Lady Lucas began directly to calculate, with more interest than the matter had ever excited before, how many years longer Mr. Bennet was likely to live; and Sir William gave it as his decided opinion, that whenever Mr. Collins should be in possession of the Longbourn estate, it would be highly expedient that both he and his wife should make their appearance at St. James's. The whole family in short were properly overjoyed on the occasion. The younger girls formed hopes of coming out a year or two sooner than they might otherwise have done; and the boys were relieved from their apprehension of Charlotte's dying an old maid. (p.122)

この手法は「制限」手法と同じように、小説の「劇的構成」に貢献する。もし外部の出来事に対する人物の心的内奥の反応が他の地の文と同じスピードで表現されるなら、人物の複雑な心の動きは十分にドラマティックに表現されることはできない。そのような心の動きについて劇的構成をはかるためには、一定の時間内で、その他の部分についてよりも多くの強力な生きた描写が必要とされる。そこで、劇的「提示部」を強調するためには状況説明等の主題提示に至る途上部の表現は「要約」の手法で処理されることは十分納得できることである。こうして人物描写、とりわけ Elizabeth の人間像も引き立つこととなる。Austen が音楽を高く評価している様子が度々の音楽についての引用によって見られるが、音楽は時間の流れに密接な芸術である。彼女が小説時間の配分の中で要約手法により強調する部分・おさえる部分と強弱・

高低をあたえ、小説の劇的構成を効果的に演出しているように思われる。

### 3. 「対照」(antithesis) 手法

この作品の説話技術の中で特に重要なパターンは、様々な形で認められる「対照」手法である。これがこの作品の演劇的構成の設定のための欠くことのできない要素となっていることは言うまでもない。

A. 先ず第一に、この問題を人物の登場から見ていくこととする。よく知られるようにこの作品では主要な人物の登場は、それぞれ「対」で表現される。すなわち Mr. Bennet と Mrs. Bennet, Elizabeth と Jane, Darcy と Wickham, Elizabeth と Darcy のようにつづく。これに基づき作者の人物表現は一層具体的、明確なものとなる。この手法で人物の特徴、心情の交流の面白さが浮かびあがる。この「対照」の働きについてさらにいくつかの例の分析を試みる。

a. 先ず、人物の最初の登場が際立った「対照」の形で紹介される。例えば冒頭の Bennet 夫妻である。実際彼等の第一印象は「対照」によって強く生き生きと描かれる。その効果を高めるために種々の技術が窺える。二人の会話が効果的に対比され、読者は二人をいかにもリアルに認識できる。彼等の容貌とか身振り動作や感情のあや等の一切の説明は省かれる。その場の雰囲気は、それぞれ独立した二つの完全な世界に二分され、微妙に葛藤する。それを演出するのは、二人の特徴的会話の軽妙なやりとりにもみられる「対照」である。

b. 第二に「対照」は行動の表現に現れる。例えば, Colonel Fitzwilliam と Darcy の行動は、互いに対照的行動として表現される。それはこの二人の場合の積極性と消極性の対照のみならず、他のほとんどの人物達の場合にも適用される。高慢で、いかめしくて、高潔な Fitzwilliam Darcy の行動は、大らかで人当たりよく、不誠実な George Wickham の行動と対比され、終局では Wickham が悪役として明らかになり、対照的に Darcy の評価が上昇し、plot の終結に貢献する。

c. 第三に、登場人物の感情の微細な変化・起伏も人物間の対比によって浮かびあがる。次の文は Elizabeth の場合である。

“Oh! no, my regret and compassion are all done away by seeing you so full of both. I know you will do him such ample justice, that I am growing every moment more unconcerned and indifferent. Your profusion makes me saving; and if you lament over him much longer, my heart will be as light as a feather.” (p. 225)

人物同士の心の繊細な反応・相剋も劇化されているのが感じられる。このような過程を通じて Austen は主要人物の特徴をくっきりと際立たせるのに成功している。

B. 主要なテーマの一つとして、ドラマティックな humour と irony があげられる。この作品に見られる Elizabeth の鋭敏な humour は特筆すべきものであり、一つの驚きである。

Mr. Collins や Lady Catherine のような滑稽な人物もそれなりの humour を備えている。しかし Elizabeth なる人物がいなければ、たとえ読者の騒がしい笑を呼ぶことはできたとしても、彼等の humour の真髄を発揮することはなかったであろう。何故なら Elizabeth の wit との強烈な対比があつてこそ、彼等の humour の要素も芸術的な域まで高められるのである。

この物語の主要な plot である Elizabeth と Darcy の間の関係の発展は、この感受性豊かな humour の発展であるとも考えられる。二人の関係は Elizabeth の ‘manners’ 観に基づく倫理的判断を主要な動機としながらも、Elizabeth の Prejudice と Darcy の Pride の対比の中で進展する。そして最後に Elizabeth の視点の拡大とともに新しい発見があり、二つの要素は一つに収斂して幸福な解決の世界に到達する。そこで Elizabeth, Darcy 両者の間の当初に見られる「対照」のさえと、終局での収束の到達点までの Elizabeth の自己発見と変りざまが事実上、この小説のテーマであり、同時に最も効果的な、豊かな humour を提供している。

irony は本来、対比がもたらす産物である。Elizabeth のつかう次の metaphor は、対比による彼女の irony と考えられる。以前会ったこともない人とは容易に会話ができないと言う Darcy に対し Elizabeth が言う。

“My fingers do not move over this instrument in the masterly manner which I see so many women’s do. They have not the same force or rapidity, and do not produce the same expression. But then I have always supposed it to be my own fault—because I would not take the trouble of practising. It is not that I do not believe my fingers as capable as any other woman’s of superior execution.” (p. 175)

この例の他、対比による irony に関しては Elizabeth と Lady Catherine の間の対話等ふんだんに見られる。

そこでこれらの検討を通じて次のように考えられる。humour における「対照」の働きは賛同を得る意味で同一方向に向かうものである。一方 irony における「対照」の働きは別方向に向かうものである。何故なら humour は、少くとも Austen の作品においては、人情という一定の基盤をもつものであり、他方 irony は笑から生まれるものだとしても、実際に表現された意味と意図された真の意味とが逆であるからである。それ故「対照」の働きからすれば、humour よりも irony の方が重要で意義があるように考えられる。

C. さらに説話形式の問題の一つとして anti-climax の手法——Mary Lascelles も言っているように、<sup>(4)</sup> Climax と対照的に正反対のもの——の例がいくつか見られる。

---

(4) Mary Lascelles: *Jane Austen and Her Art* (OUP., 1939 ~ 1948) p. 185

丁度お昼頃、Elizabeth が部屋から散歩に出かけようとしている時、突然階下から物音が家中を混乱におとすように大きく響く。すぐに誰かが大急ぎで階段をかけあがりながら、大声で彼女を呼ぶのが聞こえる。戸を開けると踊り場に Maria がいて、興奮で息を切らせながら叫ぶ。“Oh, my dear Eliza! pray make haste and come into the dining-room, for there is such a sight to be seen! I will not tell you what it is. Make haste, and come down this moment.” (p. 158) Elizabeth がいろいろたずねるが無駄である。そこで一体何が起ったのかと小路に面した食堂にかけおりてみると、それは庭園の門のところに馬車をとめてある二人の婦人であった。“And is this all?” cried Elizabeth. “I expected at least that the pigs were got into the garden, and here is nothing but Lady Catherine and her daughter!” (p. 158) と Elizabeth はがっかりする。これは「時間」的にも「空間」的にも説話上の停滞のように感じられる。直前の高まりから対照的に急速な下落である。突然に落語の「落ち」（下げ）にも匹敵するような、盛り上りから急速に落とす特有な終結が見られる。この効果は説話の進行中に現われる「対照」の働きによるものである。

次の説話形式上の問題は antiphrasis の手法である。これは彼女の irony の手段の一つと考えられる。例えば Charlotte Lucas は Mr. Collins のプロポーズを “solely from the pure and disinterested desire of an establishment.” (p. 122) (ただ純粋に所帯を持ちたいという無私の願いから) 承諾する。しかし著者はむしろ下線部の語句とは反対の意味を ironical paradox によって強調したいのである。これは一つの「対照」の手法である。

このような様々の「対照」という劇的な手法は、小説の構成上大きな意義をもっている。この説話技術によって、丁度劇が狭い舞台で広大なテーマのもとに上演されるように、この小説の制限された枠の中で、たえずわくわくさせるような期待感をもたせつつ、変化をもたせて終局まで読者の興味を持続させるよう小説全体が統一され、完成されている。

## II. 会話技法について

演劇的タイプの表現手法として重要なことは如何に主題が客観性をもって提供されるかである。作者のむき出しのまゝの意見が劇の上演中に述べられることは不可能なことである。Austen の小説家としての意図も哲学も、作品上の表現を通じて客観的に認識されることになる。彼女の説話形式の変容とか強調の中での検討が必要である。

先ず第一に、地の文と会話体の間に興味ある使い分けが見られる。R. W. Chapman も言うように<sup>(5)</sup>地の文よりも対話文の方が説話技術としてずっと優位の地位を占めているように思われる。この会話の多用は、彼女の「作者が舞台に顔を出さない態度」と密接に関係がある。会話は我々自身耳で直接聞ける、否定のできない客観的表現であるからである。さて、この会話は Direct Discourse と Interior Discourse の二つに分かれる。この配置は美的構成の要

(5) R. W. Chapman, *Jane Austen, Facts and Problems* OUP 1948 p. 209

素もあろうが、この二つの手法の主要な使用の動機は話者に対する著者の視点に帰せられる。そこで各人物が小説の中でどういう位置をしめているかも把握できる。こうして Lubbock も言うように視点の問題を考察することで次のことが明らかになる。<sup>(6)</sup>すなわち、著者の表現の出発点がどの人物におかれているか、またこの小説が芸術作品として、どの人物によって統一されているかの問題である。以上の観点から彼女の劇的手法の一面を考察する。

## 1. Direct Discourse について

Direct Discourse は説話様式のうちで最も力強い生き生きとした表現機能をもつ。Direct Discourse がその同時的直接的効果から、感性にうったえる影響力が大きいからであろう。この話法は人物の本質を描くのに最適である。彼女はこの形式で人物達の典型を目前にあるように描いてみせる。この小説には figurative language はあまり見られない。<sup>(7)</sup>Direct Discourse が人物達の特徴を伝える象徴的存在に近いものである。本作品では人物の典型の表現は、行動の描写よりも、主として生き生きと語る彼等の話し言葉によって成功しているように思える。この speech の役割は同時代の他作家より一際優れているように思える。

### (1) Comic characters の表現

先ず目立つのは comic characters の描出にかかわる Direct Discourse の役割である。comic characters のほとんどは Direct Discourse によって見事に紹介される。この成功の理由の一つは comic essence の表現される視点が人物の外側に置かれているからといえる。個々の人柄のあまりに内奥の心情にいたるまで描写があるときは、同情心がハードルとなって滑稽な性格が十分体験できなくなる。彼等は個々の人間というよりもむしろ人物の一類型に仕立てられる。以下 comic characters を具体的にとりあげて考察する。

Mrs. Bennet.

彼女は生のままの character で現われるが plot に不必要な彼女の属性は略されたままである。彼女は「貧弱な理解力と乏しい知識と移り気な性格の女である。何か不満なことでもあると、神経のせいだと思いこんだ。一生の仕事は娘たちを結婚させること、一生の慰安は訪問と世間話であった。」このような彼女の肖像は、次のような彼女独特の speech の中で生き生きと浮かびあがる。彼女が紳士の来訪を告げられると眼を輝かして言う。

“A gentleman and a stranger! It is Mr. Bingley I am sure. Why Jane—you never dropt a word of this; you sly thing! Well, I am sure I shall be extremely glad to see Mr. Bingley.—But—good Lord! how unlucky! there is not a bit of

---

(6) Percy Lubbock, *The Craft of Fiction* Jonathan Cape 1921 Chap. 11 ~ 17

(7) metaphor や simile としては次のようなものがある。

food of love (p. 44) olive branch (p. 63, p. 364) Angelic (p. 134)

as a feather (p. 225) the balm of sisterly consolation (p. 289)

an angel of light (p. 294)

fish to be got to-day. Lydia, my love, ring the bell. I must speak to Hill (maid) this moment.” (p. 61) また Gardiner からの手紙が声高く読まれる時、彼女はどうしても自制できなくなる。“My dear, dear Lydia!” she cried: “This is delightful indeed!—she will be married!—I shall see her again!—She will be married at sixteen! My good, kind brother!... Well!, I am so happy. In a short time, I shall have a daughter married. Mrs. Wickham! How well it sounds. And she was only sixteen last June.” (p. 306)

最も著るしい例として, Elizabeth の婚約を知ったとき, 彼女は叫ぶ。“Good gracious! Lord bless me! Only think! dear me! Mr. Darcy! Who would have thought it! And is it really true? Oh! my sweetest Lizzy! how rich and how great you will be! What pin-money, what jewels, what carriages you will have! Jane’s is nothing to it—nothing at all. I am so pleased—so happy. Such a charming man!—So handsome! So tall! Oh, my dear Lizzy! pray apologise for my having disliked him so much before. I hope he will overlook it. Dear, dear Lizzy. A house in town! Everything that is charming! Three daughters married! Ten thousand a year! Oh Lord! What will become of me. I shall go distracted.” (p. 378)

こういった彼女特有の言葉は、先ずひどく断片的である。これはたとえ彼女の感情が高ぶった状態にあるにせよ、彼女に適当な表現文句が見つからないからである。逆にこの表現自身から彼女が明確に興奮しやすい気質であることがわかる。感嘆文の多用, swearing 等は理性ある発言ではなく、極端な感情表現であり、愚かしさ、低い理解度、不安定な気質を表わしている。Mary Lascelles も “Jane Austen displays her virtuosity by this representation of Mrs. Bennet; the inexhaustible variety of expression devised for her unvarying reaction to circumstance, for a Mrs. Bennet who is occasionally nervous and invariably silly.”<sup>(8)</sup> と言っている。

Mr. William Collins

Austen の作品の中で不滅の comic character と言われる Mr. Collins についても吟味したい。Mary Lascelles は言う。“Indeed, he is a being of some exquisitely non-sensible world, of another element than ours, one to which he is native and endued.”<sup>(9)</sup> 実際彼は character の一類型であるばかりでなく, person の一類型に描かれているとも言える程 character の真髄である。この character の諸相は先ず、彼の Elizabeth に対するプロポーズの speech において展開される。第一は repetition のパターンである。これは本来滑稽な人物に附属する要素である。彼の場合これが彼の性格の決定的な特徴となる。何故な

(8) Mary Lascelles, *op. cit.*, p. 152

(9) *Ibid.* p. 149

ら何時の場合も反射的に自分のやり方を繰り返し通そうとするので、心底から腹を割って柔軟に他人と接触することができなくなる性格が固定されてしまうからである。彼には Elizabeth が真面目に彼の申し出を断っているとは信じられない。第二に彼の speech における不必要な程の謙譲心——特に Lady Catherine に対しては尊敬心——の表明である。これらの要素が典型を描くことにより、作品の劇的構成に貢献する。

#### Lady Catherine

Lady Catherine には次のような speech がみられる。“...Heaven and earth!—of what are you thinking? Are the shades of Pemberley to be thus polluted?...Unfeeling, selfish girl! Do you not consider that a connection with you, must disgrace him in the eyes of everybody?” (p. 357) これは無作法・粗野そのものである。G. B. Stern は「この人物はあまりに誇張された粗野の故に Austen の失敗作の一つである。<sup>(10)</sup>」と言う。しかし誇張が失敗と言えるだろうか。確かに彼女は誇張されているが、それは caricature の原則に従ったまでである。彼女は一つの類型として誇張されている。それは主として Direct Discourse の効果によるものである。

#### (2) Minor characters の表現

Jane Austen の小説において、単純に仕立てられた minor characters も plot に関係しないような無用なものではない。彼等は著るしく単調な運動量で、なお小説の構成上必須のものである。しかし Austen の技巧により単なる flat people とはなっていない。彼等はこの Direct Discourse の形式により生き生きと character を付与されている。けれども彼等は主要な comic characters のものとは違った面を具備する。一つ Mary Bennet の例をとりあげ、この違った面を考察する。

Sheila Kaye Smith は Mary について “This is in two-dimensions only, an inhabitant of Flat Land.”<sup>(11)</sup> と言及する。確かに Mary は作品中最も単純に仕立てられた character である。それは Austen が彼女から plot とは関係ないすべての人間性を奪った故である、Pride が話題になったとき、彼女は傲慢に次のように言う。

“Pride is a very common failing, I believe. By all that I have ever read, I am convinced that it is very common indeed, that human nature is particularly prone to it, and that there are very few of us who do not cherish a feeling of self-complacency on the score of some quality or other, real or imaginary.” (p. 20) Lydia の駆け落ち事件についても次のように言う。

“This is a most unfortunate affair; and will probably be much talked of. But

(10) Sheila Kaye-Smith & G. B. Stern. *Talking of Jane Austen* Cassell, London 1943 pp. 174 ~ 180

(11) *Ibid.*, p. 184

we must stem the tide of malice, and pour into the wounded bosoms of each other, the balm of sisterly consolation.” (p. 289) 彼女はこのように断片的に、家族の中で知的趣味を気どる娘か愚かな説教師のように現れ、その speech はまるで諺のように説教くさい。それは作者が筋の構成上この単純な限定的な character を必要としたからである。これも彼女の劇的手法の一つである。しかし彼女はその劇的手法のために、人物描写の点ではやゝ損失を蒙る。もしこの人物がもっと頻繁に登場の必要があれば、もっとリアルな character として成功していたであろう。そして文学かぶれの女性に対する風刺としても有効であったろう。このような犠牲をはらいながら、彼女の劇的手法による人物描写については次のように言えよう。マイナーな人物であればある程、彼女は限定的な性格を付与する度合いを強めるので、最もマイナーな人物は最も意図的に限定的にされ、著者の主観的意図の代弁者となる。こうして Mrs. Philips や Miss Bingley も、折折に著者の劇的意図に貢献する。彼等は厳格な掟のようなものに従うように、単調な一筋の話をしよう定められる<sup>(12)</sup>。彼等の言葉は要約できるが、主要人物の言葉は変幻自在で、真の人間のように様々の面をもつ実在性の高いものである。

### (3) Direct Discourse の制約——特に Elizabeth Bennet の表現について

Elizabeth Bennet は主人公であり、この小説の指標となる人物である。この意味で彼女は最も重要な人物であるばかりでなく、最も完成された人物である。そこで彼女はこの Direct Discourse についても独特な態度をとる。すなわち Direct Discourse で表現されるものは他の人物達や色々な出来事に対応する彼女の外的 character にすぎない。そこでは彼女は、良識のある理知的女性として現れる。友人 Charlotte の結婚観に理性の光をあて、Jane の非理性的な道德律を正す。そして Lady Catherine に厳しく向けられる irony もすべてその顕著な側面である。

しかしながら人物を表現する手段としては、この純然たる Direct Discourse には或る制約がある。それは大変偶発的なその時々のものであり、その折の状況によって決定されるものであり、めったにその個人全体の表現とはなりえないものである。この意味で、それは実質でなく類型であり、動的でなく変化しない静的なものである。それは客観的人間性の客観的表現、すなわち character の外的世界の外的表現と定義されてもよいであろう。

そこで特に Elizabeth について、別種の speech に注目を移すことにする。視点は character の内部に移される。これは内部の世界の外的表現である。これには Discourse の形式として、主として二種のものがある。すなわち外に現われるものと内的な心の中のものである。前者は内部の世界の情緒的表現として有効である。

Elizabeth が Pemberley 邸で意外な Darcy の面を発見し、極度の驚愕に独り言となる。

Her astonishment, however, was extreme; and continually was she repeating, “Why is he so altered? From what can it proceed? It cannot be for me, it cannot

(12) E. M. Forster, *op. cit.*, p. 66

be for my sake that his manners are thus softened. My reproofs at Hunsford could not work such a change as this. It is impossible that he should still love me.” (p. 255)

これは imaginary direct speech<sup>(13)</sup> とも言われ、また O. Funke の呼ぶ Fingierte direkte Rede<sup>(14)</sup> と思われるが、Elizabeth の心情をよく伝えている。

一方後者に関して、Elizabeth の内部の世界を客観的に表現する別の手法が見られる。これは次章で考察する。

## 2. Free Indirect Discourse (Represented Speech) について

この Discourse は ‘Represented Speech’ として言及した O. Jespersen に遡り、爾来多くの研究が重ねられてきた。<sup>(15)</sup> 人物の thought, feelings, dreams, impressions, fears 等外部からは見聞できないものを描く中間話法であるが、著者の視点と密接な関係がある。著者は人物の外側の視点から、人物の内側の思想なり、感情なりを人物の客観的存在として表現する。それ故、この form は本質的に character の内奥にひそむものの客観的表現と言える。これは効果的な dramatic な手法の一つである。

この形式のこの作品における役割として二つの重要な問題がある。一つは如何に人物を描くかであり、もう一つは plot の構成上どういう意味をもつかである。

### (1) 人物描写について

Willi Buhler も指摘するように、<sup>(16)</sup> この手法は人物を描くのには有効であるが、この作品中最も頻繁にこの形式の見られる人物は Elizabeth Bennet である。約70例みられる。これと比較して他の人物についてはただ数例を見るだけである。そこで検討の主たる対象を Elizabeth に向けてみる。

第一に、彼女の様々な reflection はこの形式を通じて表現される。reflection のような内

---

(13) 大塚高信「英文法論考」(研究社出版)1953 p. 123

(14) O. Funke *Zur ‘Erlebten Rede’ bei Galsworthy* Englische Studien 64 Band Leipzig 1929 p. 453

(15) ・represented speech: O. Jespersen, *Philosophy of Grammar*, p. 291  
・semi-indirect speech: K. Kruisinga, *Handbook*, II 1922  
・independent form of indirect discourse: G. O. Curme, *Syntax* 44 II, 3b.  
・erlebte Rede O. Funke, *Die erlebte Rede bei Galsworthy* (Englische Studien, 64)  
F. Karpf, *Die erlebte Rede im Englischen* (Anglia, 57)  
W. Gunther, *Probleme der Rededastellung*. (Nereren Sprachen, 15)  
・style indirect libre (free indirect style): C. Bally, *Antiphrase et syle indirect libre* (A Grammatical Miscellany offered to O. Jespersen).  
・free indirect speech: G. N. Leech & M. Short, *Style in Fiction* (Longman) 1981 Chap. 10  
・Free indirect discourse: McHale, B. *Free indirect discourse: a survey of recent accounts*. PTL. 3 1978.

(16) Willi Buhler, *Die “Erlebte Rede” im Englischen Roman* p. 117

的世界は地の文で表現されれば、著者の主観の羅列となり、味気ない説明文となる。しかしこの形式によれば Elizabeth は客観的に、立体的 ‘character’ として創造される。特に Elizabeth が Darcy の邸 Pemberley を訪れたとき、その環境のすばらしさのみならず、使用人の証言からも Darcy が立派な人格の、心の優しい人とわかったとき、彼に対してこれまでにない認識が芽生え、その心境が多くはこの描出話法によって表現される。そして彼女がその館の主人 Darcy に会った以後は、彼女は更に一層考えこむようになる。

Oh! why did she come? Or, why did he thus come a day before he was expected? Had they been only ten minutes sooner, they should have been beyond the reach of his discrimination,... (p. 252)

しかしながら story が進展するにつれ、彼女の reflection は質的に変化する。小説の前半は他人に対する内なる想いを表現し、極めて sensitive で witty である。ところが後半においてはこの Discourse は、次第に彼女の後悔の気持を示す自省の言葉となる。plot と関係する Elizabeth の character の注目すべき変化である。この Discourse 使用頻度も後半分において大きく増加する。

第二に、過去及び現在のことについての reflection が将来のことにも向けられる。そこでこの描出話法が Elizabeth の sense of judgment を表現する。それはまた Austen 自身の story の進展に対する予告のような働きをする。Elizabeth が Collins の妻として選ばれることに、心の中で拒否する時、あるいは Collins の住む Hunsford に行くのは気がすすまなかったが、行く判断を下す彼女の決意がこの represented speech で表現される。また彼女が Gardiner 夫人の家に立寄った時、Jane の心をさぐる機会が得られなかったことについて But Jane was to go home with her, and at Longbourn there would be leisure enough for observation (p. 217) と妥協する。このような例から、外面だけではわからない Elizabeth の人間的面が見えてくる。彼女の性格には、機知とユーモアの感覚以外に、孤独感や内気な遠慮の性向もあり、家族の非礼な振舞いから自分自身の幸福をあきらめる弱さもわかる。他人に対しては皮肉な微笑を投げかけても、内では暖かい涙の持主であることも知る。

このようにして明らかになる彼女の二面の interior character が plot の進展にも特別の意味を持つが、大切なことはその内側の性格が著者の説明で明らかになるのではなく、この represented speech の全知的視点から、客観的な表現で明らかにされることである。

## (2) 小説構成上の働きについて

この Free Indirect Discourse (Represented Speech) が Elizabeth の ‘round’ な character を描写する役割をはたすと同時に、小説の構成上にも大きい役割を持つように見える。すなわち、他の人物、自然、興味ある出来事がすべて Elizabeth の内的世界を通じて読者に紹介されるということである。

A. 彼女の見たり、経験したりすることが plot の進展の指標として、この speech で明ら

かにされる。Willi Buhler も言うように Elizabeth のこの Discourse で初めて登場する人物も多面的に紹介される。Elizabeth は Hunsford の Rosings House を訪問し、気位の高い Lady Catherine に会う。Lady Catherine was a tall, large woman, with strongly-marked features, which might once have been handsome. Her air was not conciliating, nor was her manner of receiving them, such as to make her visitors forget their inferior rank. She was not rendered formidable by silence; but whatever she said, was spoken in so authoritative a tone, as marked her self-importance,... (p. 162)

これにより我々も Lady Catherine をよく知ることになる。他の多くの人物も我々に同じ手法で紹介される。その上色々な出来事が起る場合の人々のリアルな表情が、この Discourse で表現されている。視点は Elizabeth にある。

さらに plot が進行するにつれ、彼女の初めて訪れる（読者にとっても未知の）場所についての印象がこの手法で紹介される。Pemberley 邸の環境、建物等を Elizabeth の眼を通じて、彼女の価値観で知ることになる。Mrs. Reynolds の人物説明も Elizabeth の耳を通じ、Elizabeth の心情で読者は聞くことになる（引用文省略）

このようにして Elizabeth は、いわば我々が story 上の人物達は勿論、大道具・小道具を知らされるレンズのような働きであり、我々は彼女の内的生活を通じてリアルに story を追っていくのである。この手法から小説のすべての動き・情景の視点はほとんど主人公 Elizabeth に統一される。

B. 小説上の大きな出来事と Elizabeth の内奥の世界の展開は興味深く関係し、符合する。すなわち、特に小説の後半部において、story 上の重要な出来事が発生すると常に、この Discourse を通じて彼女の内側の世界が展開する。そしてその出来事の plot に対する重要度に比例して、彼女の内奥の描写は長くなる。最も読者の感興を高揚する出来事には、最も拡大した彼女の内奥が現れる。Darcy がプロポーズをして断られるあの著名な climax の折にはえんえんとした彼女の内的描写が続く。（引用文省略）これは顕著に、この小説の劇的構成を示すものである。すなわち外的 climax と、その後大きな変化を受ける主役の内的な climax の完全な一致である。この現象は彼女の他の作品にもそれなりに見られるのは事実であるが、特にこの作品において最も大きい劇的効果をあげているように思える。多分一つは Darcy という強力な人物が配置されていることにも理由があろう。この Free Indirect Discourse が、この作品の plot の展開に、重要な意味をもつことは明らかである。

### (3) 抒情的要素の表現

この Discourse から T. S. Eliot の言う<sup>(17)</sup>どんな artistic transformation を受けるかが問題となる。Elizabeth は Darcy の手紙を読んだ後、最愛の姉 Jane に想いを向ける。

How grieved then was the thought that, of a situation so desirable in every

respect, so replete with advantage, so promising for happiness, Jane had been deprived, by the folly and indecorum of her own family! (p. 213) また Elizabeth が Hounsford のコリンズ家から帰ろうとする時、彼女は友人 Collins 夫人に同情を感じる。Poor Charlotte!—it was melancholy to leave her to such society—But she had chosen it with her eyes open... (p. 216)

これらの彼女の内奥の告白において、彼女が大層優しい心の持主として描かれる。これらの表現は情緒的な色彩の濃いものである。これがこの Discourse の内に備えている Lyrical element である。この要素はむしろ、多くの場面で散見される短かい文言や発語において強く表現される。(引用文省略) これら長い文節の中に挿入された表現が、おさえ気味の reporting speech と対照的に、その emotional colour が著しい劇的效果を高める。ここにこの洗練された描出話法の使用に Austen の芸術的天性を発見するのである。もし著者自身が地の文で情緒的な表現をすれば、それはいわば感傷的な描写に終るだろう。Austen のように、地の文は逆に具体的客観的表現であり、情緒的なものは人物の心情的体験に変換されて表現されれば、決して感傷的に流されず、人物は生き生きと描写される。Marguerite Lips も賞讃する、Free Indirect Discourse のこの優れた運用から、Austen 文学の発展性が考えられる。<sup>(18)</sup> 彼女の最終作 *Persuasion* ではこの手法はますます叙述度を増すことになりより情緒的な色彩を加える。Virginia Woolf のように Austen のロマンス性を発見したと言う批評家も多い。story 全体の中ではさらに吟味の必要はあると思える。

## 結 び

Jane Austen が小説の材料として、身のまわりの日常的な生活以外のものをあてがうことはなかったということはよく知られていることである。Scott は躊躇せず次のように日記に書いている。“That young lady had a talent for describing the involvements and feelings and character of ordinary life which is to me the most wonderful I ever met with.” 実際彼女の作品の真の偉大さは、主にその主題から生まれるものではなく、むしろそのすばらしい narrative art の結晶からのものである。この説話技術によって、精選された素材、当時の地方の平凡な出来事が、錬金術のように芸術的な一つの真理によみがえる。機知と冷静な判断力と鋭敏な感性を備えた一人の女性の典型 Elizabeth の自己変化の過程と人間相互の関係が、調和を保って収斂し全体を構成して不滅の真理を描く。

彼女の作品は何度も読み、よく味わわなければ偉大さは理解できない。彼女は確かに波瀾ある歴史を描くのでもなく、偉大さを把握するには困難な作家である。しかし人間とそのお互いの反応を見事に小説に構成し、美的に完全な世界を構築する。その作家としての天才的とも言

(17) T. S. Eliot, *Essays in Criticism*. Perfect Critic Tokyo Naundo p. 19

(18) Marguerite Lips, *Le Style Indirect Libre* Paris 1926 p. 214

える手腕を可能にしたのは、その吟味された説話技術によるところが多い。本論の各章で指摘を試みたように、その narrative form において、様々な劇的要素が見える。この事は Austen の極めて重要な説話技術であるように思える。この作品の全体が無駄なく均整をとりつつ読者の注意をそらさぬように構成され、主題が純粹に、客観的に、リアルに浮かびあがるからである。これが彼女の現代性 (modernity) の一つとして、或いは彼女の世界の普遍化 (universalization) として、価値あるもののように思われる。

主なる参考文献

- Chapman, R. W., *The Novels of Jane Austen* 5 vols. Oxford (OUP 1923—1988)  
Gilson, D., *A bibliography of Jane Austen* Oxford (Clarendon Press 1982)  
Austen-Leigh, M. A., *Personal aspects of Jane Austen* London (John Murray, 1920)  
Austen-Leigh, J. E., *A memoir of Jane Austen* London (Richard Bentley, 1870)  
Bradley, A. C., *Jane Austen: a lecture, Essays and Studies by members of the English Association* 2 (1911), 7—36  
Bühler, willi, *Die 'erlebte Rede' im englischen Roman: Schweizer Anglistische Arbeiten*, 4 Zurich (Max Niehans Verlag 1937)  
Chapman, R. W., *Jane Austen...facts and problems* Oxford (Clarendon Press 1948)  
Curme, G. O., *A Grammar of the English Language, vol. III Syntax* Boston (Heath 1931)  
Eillipi, Rosina, *Dialogues from Jane Austen* London (J. M. Dent & sons 1929)  
Forster, E. M., *Aspects of the Novel* London (Ekward Arnold 1953)  
Funke, O., *Zur 'Erlebten Rede', bei Galsworthy* Englische Studien 64 Band Leipzig (1929)  
Jespersen, O., *The Philosophy of Grammar* London (Allen 1924)  
Kaye-Smith Sheila & Stern, G. B., *Talking of Jane Austen* London (Cassell 1950)  
Lascelles, Mary, *Jane Austen and Her Art* Oxford (OUP 1939)  
Leech, G. N. & Short M., *Style in fiction* London (Longman 1981)  
Lubbock, Percy, *The Craft of fiction* London (Jonathan Cape 1921)  
Muir, Edwin, *The Structure of the Novel* London (Hogarth Press 1928)  
Stokes, Myra, *The Language of Jane Austen* London (Macmillan 1991)  
Allen, Walter, *The English Novel: A Short Critical History* London (Phoenix House 1954)

- 大塚高信「英文法論考」 研究社出版 1953  
川本静子「ジェイン・オースティンと娘たち」 研究社出版 1984  
佐々木達「語学試論集」 研究社出版 1950  
田辺昌美「ジェイン・オースティンの文学」 あぼろん社 1965  
直野裕子「ジェイン・オースティンの小説」 開文社出版 1986  
蛭川久康「ジェイン・オースティン」 英潮社新社 1977